
解決不可能事件～超能力～

me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

解決不可能事件〜超能力〜

【Nコード】

N4171X

【作者名】

me

【あらすじ】

憧れの警察官になれた新人警官、榊原右京（勉強出来るだけ）の身の回りで起こる不可解な事件。

共に捜査するのは同期の女刑事、前原飛鳥（運動出来るだけ。後容姿が中学生）

大都会で、噛み合わせの悪い二人が必死に（グダグダ）捜査！死闘（？）を繰り返す！

プロローグ（前書き）

一応SF物です。

しおりを挟みやすい様に各話は割と短めにしました。

最初あたりは余り話が進みませんが気長に読んでいただけると幸いです。

プロローグ

青年が1人、暗い裏道を歩いている。弱そうな学生を裏道に連れ込み金を巻き上げた帰り道だ。

身勝手な優越感に浸りながら歩いていると背後から誰かが近づく物音が聞こえて来た……………

さっきのヤツが追いかけて来たのか、などと深く考えずに振り返った瞬間。

青年の体が炎に飲み込まれた。

—————

警察署に配属されて一日目。自己紹介もロクに済んでいないにもかかわらず、先輩刑事に無理矢理事件現場に連れて行かれた。しかもそこは殺人現場ときた。

が、死体らしき物は見当たらない。あるのは炭の塊の様なものだけ。そう。焼死体と言うヤツである。

「なんか……………殺人現場って感じしませんね」
素直な感想を述べる。

「だな。死体が辛うじて人の面影を残してる程度だ。無理もない」

「事故……………の可能性は？」

「ま、それも一応視野に入れて調査するさ。
取り敢えずあとは鑑識に任せておこう。お前もうちの部署の連中と
まだ顔合わせてないし、1回戻るとするか」

．．．．．そっぴやそっぴだっぴっけ。

プロローグ（後書き）

この時点ではSFとか超能力要素ゼロです。

第一章 合流

まずは署に戻り挨拶を済ませることに。

「今日からお世話になります、榊原右京です。どうぞよろしく願います」

挨拶のあと色んな人が声を掛けてくれる。明るい雰囲気だ。これならやっていけそうな気がする。年齢や出身校を聞かれたり冗談混じりに、へー京都みたいな名前だね。とか言われたりもした。

一区切りついたあと、自分を事件現場に強制的に連れて行った先輩刑事、河野さんに声をかけられた。

「んじゃあまあ、その窓際のデスク使つてよ」

【窓際族】と言う単語が一瞬頭をよぎるが、まあ、気にしすぎだろう。サラリーマンじゃあるまいし。

指示されたデスクに意識を向けて初めて、その席の隣に人が座っているのに気付いた。

そこには中学年？．．．いや、高校生かな？という位の女の子が座ってケータイを弄っている。

誰かの娘さんか？それとも補導されたのか？

無視して座るわけにもいかなないので取り敢えず声をかけて見る事に。

「あの．．．．．君、どうしてここにいるの？」

「そんな事、聞かなくてもわかるだろう。頭おかしいんじゃないか？」

．．．．．

若干イラついたものの相手は子供。平静を装い再び優しく声をかける。

「いやぁ流石に聞かないとわからないよ」

「疑問が確信に変わった。お前は頭がおかしい。」

流石にこの言い草には我慢ならない。舐められているのかもしれないし、少し強く出る事にした。

「そんな事分かるわけないだろ！良いから答えなさい」

すると今度は気怠そうに携帯から目を離し向こうから声をかけて来た。

「逆に聞く。私をなんだと思ってるんだ」

「補導されたか誰かの娘か。ま、そんな所かな」

軽く返事しただけの筈がどうやら地雷を踏んだらしい。

「娘！補導！お前一体私が何に見える！」

急に口調が強くなったため少し面食らってしまった

「ん、あつと、えーっと、中学せ」

！

気付いたら床に転がされていた。どうやら何かしらの技をかけられたらしい。と言うか結構痛い。それと中学生？の女の子がギャーギャー騒いで耳も痛い。にも拘わらず周りの刑事達は笑って見ているだけである。どう言う事だろうか？

「ふざけるなこのカス人間！」

「カスって……ボキャブラリー少ないな」

「黙れカス！ゴミ！塵！クズ！えっと……カス！」

「またそれかよ．．．．．って言うか離せ！あと何で怒ってんだよ！」

「信じるよ！今から私が言う事を！絶対に！でないと殺すぞ！」

怒りで顔が真っ赤になっている。

「分かった！分かったから！」

その女の子が恥ずかしそうに、小さな声で呟く。

「私は．．．．．正真正銘．．．．．21歳だ」

「ぷっ」

つい笑ってしまった。そしてそれが命取りになった。

破壊音の様な物が鳴り響く。

搜查へ

「痛っ……！痛い痛い痛い痛い！」

「そのまま死ね！」

関節技をかけられる。と言うか本気でもがいているのに逃げられないってどんだけ力強いんだよ。

「二、河野さん助けて！」

たまらず助けを求める榊原。

「あつははははははは、いやあ前原は結構気難しいヤツなのに、もう仲良くなったのか！」

「うわあああああああ見捨てられた！」

と、ここで今柗原が感じている痛みが全て吹っ飛ぶ。

原因は河野が発した言葉。

「いやあ良いねえははは。これなら二人でコンビ組ませても大丈夫そうだな」

!

!

勿論自分よりも早く前原？とか言う小さい女が抗議する。

「河野！こんな不謹慎な奴と組むなんて御免だぞ！」

「不謹慎の使い方間違ってるしって痛い！痛い！」

「ほら！こんな細かく揚げ足取る様な人間だぞ！きっと性格もカスみたいなヤツに決まってる！」

「細かく揚げ足．．．．．間違つては．．．．．ないか」
ギヤーギヤーと一応初対面の二人が喧嘩していると

「ははは。まあまあ、初対面でこんなに仲良く話せるなんてきつと
相性良いんだよ。前原と榊原。合わせてハラハラ（原原）コンビ。
なんちゃってゝあつははははははは」

「河野」

「ん、どうした前原」

「死ね」

「なつ、お前先輩に向かつて死ねとはなんだ！」
今度は榊原が割って入る。

「そつだよ失礼だぞ。礼儀がなつてない」

「だろゝやっぱり分かつてるねえ」

河野が嬉しそくに声を上げる

「死ねは言い過ぎだぞ。そこはつまらないか寒い、位にしとかな
いと」

「あはははははははははは」

前原が榊原の前で初めて笑った。

「てっ、お前らなあゝ．．．．．よし！分かった！やつ
ぱりお前ら二人で捜査いけ！」

「無理だ！」

「無理ですって」

2人して声をあげる。

「まあ良いじゃねえか。ドラマとかでもよくあるだろ。男女ペアがさ、最初は仲悪くても最終回までには恋愛感情まで芽生えてる。なんて事がさ。」

「恋愛感情！無理無理無理！こんな細かい成金男！」

「成金じゃねえよ！」

「じゃ、早速聞き込み宜しく」

「ちよつ、待てよ！河野！」

「つーか先輩を呼び捨てとか……………良いのかよ」
「うるさい！死ね！」

「死ねしかいえないのかよ。中学生か」

「五月蠅い！カス！消えろ！帰れ！かえれえ！」

「お前……………やっぱ語彙が少ないな。後なんでそんなに気持ち悪い喋り方なんだ？」

「気持ち悪い……………私の喋り方のどこが気持ち悪いのだ！いたって普通ではないか！」

「ゝのだ！とか、ゝではないか！とか、さ」

「…何だその嘲る様な顔は！」

「嘲る……………まさかお前がそんな難しい言葉を知ってるなんてって痛い痛い痛い！」

「さあさあ、取り敢えず例の焼死事件の捜査宜しく」
こうして2人は河野に叩き出された。

捜査へ（後書き）

やっと動き出しました

捜査開始

結局無理矢理捜査に駆り出された2人。

榊原は取り敢えず話しかけることにした。

「で、どうする?」

「どうするって．．．この2人じゃ現場まで行ってみるか聞き込みするかぐらいしかないだろう」

「どうして」

「どうしてって．．．ドラマとかじゃその二つが鉄板だろう。まだ身元が割れてないし、遺族に会いに行くって言う選択はないしな」

前原が続ける。

「ところで場所、分かるのか?私はしらんぞ」

「わかんねえのに提案したのかよ。まあ俺は一度無理矢理連れて行かれたから場所は覚えてるし、あの時は細かく見てなかったから、もう一度いつてみるか」

――――

現場はまだ鑑識が調査を続けていた。相変わらず薄暗く不潔な場所だ。警察手帳を見せ、中に入れてもらう。と、そこで声をかけられた。

声をかけてきたのは、恐らく20代後半位であろう鑑識の男だ。茶髪だからか、チャラチャラした印象を受ける。

「2人とも顔合わせたことないけど、もしか

して配属されたばかり？」

「ええ、初めまして。榊原右京です」

「前原飛鳥。21歳です」

「ぷっ」

「笑うな右京！」

「ゴメンゴメって痛い痛い痛い！つねるなって！ちょっ・離せって！」

「えーっと．．．．．刑事さんがここに来たってことは、やっぱり捜査だよな」

「あ、はい。何か分かったことはありませんか」
前原の手を振り払いながら榊原が尋ねる。

「ああ。ちょうど身元がわかった所だよ。被害者は木寺障寺、19歳で身内はいない。職にはついておらず生活保護だけで生活していたみたいだ」

「へえ、寺みたいな名前だな」

前原が余計なことを言うが黙殺する。

「他に分かったことは？」

「今の段階ではそれ位かな。まだ使われた道具も特定できていないし」

これ以上の情報は得られないか．．．．．
そう判断して現場を離れた。次は聞き込みだ。

前原の精神年齢が低過ぎて困る

やはり現場のすぐ近くを聞き込むことに。

まずは、隣のコンビニに入った。

「すみません。ちょっとよろしいでしょうか」

例のごとく榊原が、恐らくバイトの学生であろう青年に声を掛ける。

「あ．．．．．どうされましたか？」

警察手帳を見せた為かあからさまに警戒されたのが分かる。

「実は今日この近くで若い男性の死体が見つかったのですが、その事はご存知ですか？」

「ええ、そりゃ、隣であんなに騒ぎになれば知らないってことはないでしょう。普通」

まあ、確かにそれもそうか。もう少し核心に触れる質問しないとな。

「では、こ．．．」

「あの．．．．．」

バイト風の店員が言葉を遮る。

「その、刑事さんの隣にいる女の子は．．．．．？」

！

「貴様！い「この子は！！．．．．．こんな見た目でも一応私と同じ年なんですよ、あははは、ああと、勿論同じ警察官ですよ」前原が民間人にキレる寸前でなんとか榊原が割って入る。すると今度は怒りの矛先が榊原に向いてしまった。

「おい榊原！こんな見た目とはどう言う意味だ！答えるこのカス人間！」

「ちょ待て待て待て！コンビニの中で叫ぶな！待てって痛いから！ひねるなひねるな！痛い痛い痛い痛い！」

勿論コンビニにいるお客さんがこっちに注目している。

「おい！前原！みんな見てるから！良いから後にしろって！」

「うるさい関係ない！一応同年だと？何が一応だよ！正真正銘同年だろうが！しょう！しん！しょう！めい！」

「ゴメンゴメンゴメンゴメンゴメン痛い痛い痛い痛い！」

こんな事で本気でキレるとか・・・小学生かよ。

「あゝ」

店員さんが声を掛けてくれたお陰でなんとか前原から逃れる事に成功した榊原。と言うか元はこの店員が余計な事を言うからこんな事になったのだ。

「今は休憩時間ですけど・・・・・・もう30分無い位ですよ？それに・・・話したい事もありますし・・・・・・」

不思議と今は距離を置かれている様な印象は受けない。前原とのさっきの喧嘩（一方的）のお陰で緊張がほぐれたのだろうか？最初より言葉も柔らかく感じる。だとしたら今日初めて前原に感謝するけど・・・。それよりも話したい事があると言うのが気になる。

「すみません、では、お聞かせいただけますか？その・・・話し
たい事を」

証言

「で、結局何を見たのだ？」

前原が尋ねる。

「犯人．．．．．的な、人。」

恐る恐ると言った感じで店員が答えた。

「本当ですか！」

「本当か！」

同時に声を上げる2人。

「ええ、まあ一応」

「詳しく話してもらえますか？」

榊原が促す。

「ええ、わかり．．．．．ました。その．．．．．昨日の夜の話ですけど．．．．．」

昨日、午後11時半頃なんですけど、その日のバイトが終わってちようど帰ろうとしていた所だったんです。

支度を済ませて帰ろうとした時、裏道がやけに明るく光ってたので覗いてみたんです。

そしたら炎が上がってて、その中心に、炎の中心にですよ！．．．

．．．男が立ってて。しかもその人の．．．．．えっと．．．

．．．．．

「どうしたのだ？続けて貰って構わないぞ」

我慢出来ずに声を上げる前原。

えつと．．．見間違いだと思うんですけど．．．．．
その炎は．．．．．男の体から発生している様に見えたんです．
．．．

――

2人だけの話し合い

聞き込みを終えた2人は署に戻る事にした。
今はその帰り道である。

真横をマフラーを外したバイクが轟音を響かせながら通って行く。
お互言葉を交わす事なく歩いている。と、そこで沈黙を破ったのは
榊原の方だった。

「なあ、前原。さっきの話どう思う？」

「信じろと言われても難しいな。あの話を真に受けるなら、犯人は
超能力者と言う事になるぞ」

あの話、と言うのは先ほどの証言である。

「彼は犯人の体から炎がでていた、と言っていた。しかし常識的に
考えればあり得ない」

つまり、と付け加えて前原が続ける。

「あの証言はあまり当てにしない方が良くかもしれんな」

「そうか、あの人が嘘ついてる様には見えなかったけど？」

「ならば本気で言っていたのだろう。だが本気で言った事が全て真
実とは限らない。恐らく漫画か何かの影響でも受けたのだろう」

「ふん。漫画みたいな喋り方にくせによく言うよ」

例の如く殴られた榊原。

「いってえ……でもさ、ほら、発火能力とかあるじゃん。
パイロキネシスだっけ？」

「だっけ？とか聞かれても私は分からんぞ。そんな馬鹿馬鹿しいも

のある訳ない。虚構だ虚構。まあ体から炎が出ていたと言う事は火炎放射器の様なものを使ったのではないかと推測される」

「火炎放射器ねえ、そんなもの持ってたら殺した後逃げられないんじゃないか？」

「知らんよそんな事。小さいのもあるんじゃないのか？手のひらサイズとか」

こいつまた無責任な事を。堪らず榊原が突っ込む。

「イヤイヤ手のひらサイズの火炎放射器なんてチャッカマン位しか無いだろ」

「まあ炎の話はもう良いだろう。あの証言は忘れよう。それより犯人の特徴も言っていただろ。何だっけ？」

チャッカマンスルーかよ。と言うか捜査協力してくれた人の証言の一部を無かった事にして良いのか？と一瞬思ったがやはり自分もあの話は信じられない。前原の言う通りそっちの証言を気にした方が良いかもしれない。

「えっと、あの話によると犯人は恐らく男で、身長は高い方、顔は見えなかったらしい」

「成る程。河野に報告出来るのはこの位か。それともそのパイロキ何とかも報告するか？」

最後に付け足した言葉は殆どふざけて言ってみただけ。しかし榊原は少し迷って答えた。

「一応………報告しておこう」

心の何処かでまだこの事件の事を軽く見ていたのかも知れない

署に戻り河野に全てを話した榊原。

勿論超能力の件は河野に笑い飛ばされて終わりだった。

「だから言っただろう。あんな事誰も信じるわけないだろう」前原が勝ち誇った様な顔をしているのがムカつく。

「でもさ、これじゃあ犯人特定できないぞ。正直ロクな収穫無かったよなあ」

「全くだ。右京、何かできないのか？」

前原が唐突にわけの分からない事を言い出した。

「何かって・・・何だよ」

当たり前前の疑問をぶつける。

「ほら、例えばその辺にあるもので計算式書いたら犯人わかつちやったとか、キーワード紙に書いて千切って放り投げたら犯人わかつちやったとか」

「そんな物語みたいに事が進む訳ないだろ、むーり」

「つまらん解答だ、暇潰しにもならん」

「暇なら少しでも事件解決出来る様に努力しろ」つまらないツッコミをする榊原。

グダグダと雑談する2人。しかしこんくだらない話が出るのも
余裕があるからだ。

次の日の朝、被害者が7人にまで達する事など、今の2人には知る
由も無い。

「実は．．さ、黙ておくのも嫌だったから、僕に前科があるって説明したんだけど、そしたらそんな人とは付き合えないみたいな事言われちゃって」

「何だ、そんな事でフラれたのか。そんな事ならお兄ちゃんは気にする必要は無いぞ。昔何があっただけで人を判断する様なヤツ、お兄ちゃんにはもつたいたない位だ。きつと性格も相当悪いぞ。別れておいて正解だ、せーかい」

軽い口調だか、前原が兄の鏡花を思う気持ちは痛いほど伝わってくる。

「ありがとう、飛鳥。何か飛鳥には迷惑かけっぱなしだよ」寂しそうに鏡花が呟く。

「何を言っているのだ、あらたまって」

「お兄ちゃんのせいで、辛い思いとかもしただろうし、警察官になるのだって」

「あれは私が謝りたい位だ！私が警察官になりたいなどと言っくだらん夢を捨てられないせいで、お兄ちゃんとの法的な家族関係まで断ち切ってしまった！」

しかし前原が何と言おうが鏡花はまだ自分を責めている。

「正直お兄ちゃんという、飛鳥には何も良い事が無かったと思うんだ。いつその事、この家からも出て行った方が良」

「それはダメだ！」

そう叫んで前原は鏡花に抱きついた。

「私は．．．．私はお兄ちゃんと一緒にいたいんだ．．．．
．．．私のためにも．．．．私のそばに居てくれ．．．．
．．．お兄ちゃんは．．．．私にとってたった一人の家
族なんだ．．．．一人じゃ寂しいよお．．．．」泣
きそうな声で兄に縋る前原。

突然の事で、驚きからか何も声がかけれない鏡花。しかし鏡花の
目からも自然と涙がこぼれていた。

沈黙

次の日署に到着した榊原右京を待っていたのは重苦しい沈黙だった。あの前原でさえも黙って静かに座っている。不思議に思い声をかけようとする。と、ある異変に気付いた。ホワイトボードに貼られた事件関係者の写真が昨日よりも明らかに増えている。そしてその写真の横に書かれた文字を見て気付いてしまった。それらが全て新しい被害者のものであると。驚きのあまり黙って突っ立っていると不意に前原が声をかけて来た。

「新しい被害者は6人。これで合計7人だ。今回被害に遭った6人と最初の1人の殺され方は全く同じ。ただ、唯一違うのは最初の1人は身分がわかるものがなの一つ無かったのに対して、今回はわざと免許証や生徒手帳などを残している事だ。処分した方が捕まりづらいいにも拘わらず犯人はそうしなかった。．．．ふつ．．．つまり遊ばれている訳だな。お陰で親族を呼ぶ事もできた訳だ。何度も何度も親の泣き声やらを聞いてこっちは気が滅入りそうだ」

前原が纏っている空気がいつもと全然違うのが分かる。話し掛けるのさえも気まずい。が、幸いな事に何も言わずとも前原が話し続けてくれた。

「話を聞く限り被害者は全て、働いてもいないヤツや学校にも顔を出していない様な口くでもないのばかりだった。おそらく犯人もわざとそう言う奴らを狙ったのだろう」

声も暗いし、いつもの元気など微塵も感じられない。と、不意に前原に呼び掛けられた。

「右京」

「ん、何だ？」

前原と話しているだけなのに、何故か緊張してしまう。

「お前に一つ提案がある。正直こんな空気の時言う事かどうかかわからん。いつもならバカにされて終わる様な事だが、一つ、犯人を捕まえる方法を思い付いた。真剣に聞いて欲しいのだ」

今の前原がこの状況でボケる事は無いだろう。となればどんな内容だろうとも、前原が真剣に考えた事だ。バカになどするはずがない。いや、出来るはずも無い。

動き出す

「囧．．．．．になれ？」

怪訝そうな声で聞き返す榊原。語尾も上がっている。そう。前原飛鳥が言う犯人を捕まえる方法とはこの事だ。

「わ、私はこれでも真剣に考えたのだぞ！ほら、ドラマとかでも良があるだろ！囧捜査とか！」

あからさまに榊原の真面目な雰囲気が消え失せた為か、かなり慌てている様だ。

「だから物語と現実を一緒にするなつて。そんなの無理だよ」

「やってみなければ分からないだろ！せめて話だけでも聞いてくれ！」

本人はいたって真面目に考えた事らしく顔を真っ赤にして食いついてくる。取り敢えず話しぐらいは聞いてやる事に。

「で、どんな作戦なんだ？」

こちらが興味を示した為か前原は張り切つて説明し始めた。

「えっと、．．．．．被害者に共通している事は全員がチャラチャラした不良達だと言う事だ。つまり．．．．．」

待てよ。嫌な予感がする。囧捜査＋全員が不良＋前原の頭〓で導き出される作戦なんて．．．．．

「右京にやって欲しい事は一つ！不良っぽい格好で犯人を呼び寄せ
て欲しい！」

想像通り過ぎて思わず笑ってしまった。

そして笑ったら案の定前原に殴られた。

接触

結局前原の提案に従う事となった榊原は現在、裏道で極悪と書いてあるわけの分からないジャージを着て吸った事もないタバコを吸っている。

「はあ。こんなの成功するわけないよなあ」

ため息混じりに本音がこぼれる。ちなみに前原はと言うと少し遠くに車を停め、その中からこちらを見守って（監視して）いる。良い加減路上に座っているだけと言うのにも飽きてきたので前原に電話をかける事に。すぐに前原は電話に出た。

「もしもし、前原。こんなのぶっちゃけ無理じゃないか？」

「右京が諦めてどうする。あと貴様が電話していると犯人はおそらく接触してこない。と言う事で切るぞ」

宣言通り榊原が何か言う前に通話は切られた。榊原が恨みがましく車の方を見ると前原が手であっちへ行け、と言う動作をしている。こっちを向いたら犯人が接触してこなくなるだろ、と言う前原の心の声が聞こえてくる様でなんだか余計に悔しい。

と、ここで想定外の事が起きた。一人のいかにも優しそうな見た目の青年が声をかけてきたのだ。ただし榊原ではなく、車の中の前原に。

「あの、すいませう」

クルマの窓をコンコンと叩きながら好青年（仮）が呼び掛けている。前原も仕方なく応じている様だ。

「なんだ、今忙しいのだが」

不機嫌を隠さずに応じる前原。ちなみに榊原は心配そうにその様子を眺めている。

「前原飛鳥さんと言うのは貴方で間違いありませんか？」

驚いた事に向こうは名前を知っている様だ。

しかしこの男、申し訳ないが全く覚えがない。

「うむ。私が前原だか………申し訳ないが私は貴方に心当たりが………」

するといきなり好青年（仮）が気持悪い笑いを浮かべた。

「知らなくても良いんですよ。私ね、頼み事をされてるんですよ」

「……………結局私に何の用があるのだ」

その問いかけにも無視して話し続ける青年（不気味）

「その仕事はさ、これ」

そうつぶやいた瞬間青年の右手が爆ぜた。つぎの瞬間には前原が乗っていたクルマが爆発、炎上した。

交戦

前原の乗る車が炎上した。そう気づいた時には既に榊原の脚は動いていた。

急いで車に駆け寄ろうとする。が、しかし目の前に青年が立ちはだかった。

「お前も仕事の対象なんだよ！」

そう叫んで青年は手を振りかざす。そして驚く事にそこから真っ赤な炎が出現した。

「！」

避けると言うよりは殆ど真横に転ぶと言う感じて辛うじて回避する。無理な姿勢から無理矢理によけた為、案の定体制を崩してしまった。青年は今がチャンスとばかりに再び炎を振りかざそうとする。今の榊原は尻餅についているため彼の運動能力ではおそらく次の攻撃は避けられない。が、攻撃を受けるより先に爆発にも似た音が鼓膜に響いた。そして青年はうめき声を上げて榊原から離れてゆく。この音は学校で何度も聞いた事がある。間違いない。銃声だ。

「何を遊んでいるのだこの馬鹿」

不意に声が届いた。

この少女の様な声、この喋り方。間違いない。

「前原！」

「何を驚いているのだ。私はあの程度で死ぬ程柔な人間ではないぞ」言葉こそ軽いものの、前原の頭からは血が流れ右の頬まで垂れている。間一髪といった所だ。あと少し逃げるのが遅れれば確実に死んでいた。

「右京。これが件のパイロキなんとかってヤツか」

「パイロキネシス。インターネットで検索すりゃ、必ずといって良い程ヒットするメジャーな超能力だが、本当にいるなんて信じられない……」

ここまで見せられてもまだ何かトリックを使っているのでは、と思ってしまう。それ程に今二人に起こっている現象は不思議なものだ。

「……………グダグダ話してんじゃねえ!!」

叫び声と共に再び炎が二人に迫る。

「!!」

綺麗に真横に回避、着地してなおかつ既に銃口を青年に向ける前原。避けようとした所足がもつれ四つん這いになりながら必死に炎から離れようとする榊原。

「チツ、使えん男だ!」

呟きながら前原は青年になんの迷いもなく発砲する。万全の状態なら両足を撃って犯人を動けなくする事など前原の射撃のスキルを持つてすれば難しい事ではない。が、しかし今の前原は頭を打った時のダメージがまだ残っており、榊原を助けた最初の一発はなんとか命中したものの、今回に至っては一発も当たらない。と、突然犯人が逆上して叫ぶ。

「ったつくよぉ、なんで俺の邪魔ばつかするんだよ!」

「犯罪者の邪魔をするのが警察の仕事なのだ。悪く思っな」と前原。

「そもそもなんの罪もない一般人を何人も殺しておいて、何が邪魔するんだ」

榊原も割り込む。

すると突然青年がクスクスと笑いだした。

「何がおかしい！」

榊原が大声を張り上げる

「いやあ、アンタさ、今罪のない一般人とか言ったな。まずその前提が間違ってるんだわ。俺が殺したのは全員どうしようもないクズ！社会のゴミ！！！！。．．．．いわば俺はゴミ掃除のボランティアをしてるってことなんだよ。それに別にあいつらが死んで困るようなヤツなんて誰もいないだろ？」

！

この言葉で被害者の家族の事をふと思い出した。彼らは全員同じ表情をしていた。皆泣いていた。悲しんでいた。そしてそれを思い出した瞬間言いようも無い怒りが込み上げてきた

「ああ？何黙っちゃってんの？もしかして俺の言葉に心を打たれちゃった？ハハハ」

ーこいつは何も分かってないー

「死んで困るようなヤツがいないだと！ふざけるな！どんな人間にもその人を思う家族がいる！仲間や友人がいる！そんな事もわからず、殺人を正当化してこんな事をやっている貴様はただの自己満足クソ野郎だ！だからお前も死ね！いやいつそお前だけ死ね！」

気付けば、思っていた事を全て吐き出していた。そして勿論犯人を刺激してしまった。

「ふざけんなこの偽善者があああああ！」

青年が腕を思い切り振るうと路地の半分を埋め尽くす巨大な火柱が上がった。

そしてそれは真っ直ぐ前原に向かう。

驚きのあまり足が動かない。避けられない、と前原は悟った。それでも体は動かない。

しかし前原の体が突然真横に弾かれた。榊原が前原を真横に突き飛ばしたのだ。

『右京、ダメだ．．．．．．そんな事したら．．．．．』

と、思った時には既に榊原の体は炎に飲み込まれていた。

超常現象

炎に飲まれた瞬間、前原の顔が見えた。

今にも泣き出しそうな子供の様な顔をしていた。

「俺・・・・・・・・死ぬのか・・・・・・・・」

他人事の様な考えが頭に浮かぶ。

すでに炎で目の前が真っ赤だというのに、ほとんど熱さを感じない。
ヒーターの前に座り過ぎた時の様に、僅かにヒリヒリ痛むだけだ。

と、体に衝撃を受けた。しかしこれは地面にぶつかった、早い話が
転けただけだ。

耳元に前原の声が届く。しかしその声も次第に聞こえなく・・・・・・・・

ならなかった。

冷静によく見ると自分の体に炎は燃え移っていない。

「右京。一体何が・・・・・・・・」

前原が話しかけて来たが、こっちが聞きたい位だ。何故、自分は無
傷で立っているんだ？

混乱する頭をなんとか働かせようとする。

と、いきなり大声が榊原の耳に飛び込んで来た。

「ふ、ふざけんじゃねえエエエ」

犯人の手から再び炎があがり、榊原を襲う。

突然の出来事だった。よけられるはずも無い。しかしよける必要も無かった。犯人の放った炎は榊原の体に触れた瞬間音もなく消えていった。

「なんだよ……………何なんだよ！」

パニックに陥った犯人は無差別に炎の塊を放つ。しかしそれらは榊原の身体に触れた瞬間全て消滅していく。

特別何かをしたわけでは無い。ただ突っ立っているだけで全ての攻撃を無効化できるのだ。

驚きのあまり放心する榊原。

すると突然前原が叫んだ。

「何が起こっているか全く分からんが、とにかくチャンスだ！ここで一気に片付けろ！走れ右京！」

そうだ、犯人の攻撃が通用しない今が確かにチャンスだ。

「うおおおおおおおお！」

叫びながら走る榊原。もちろん犯人の元へ。

犯人は守りに入るつもりか、目の前に炎の壁を作る。

しかし榊原はそこに何も無いかの様に通過する。

犯人はもう目の前だ。やる事は一つしかない。

榊原は警棒を引き抜き犯人の顔面を思い切りぶん殴った。

漫画や小説みたいに派手に何mも吹っ飛ぶ、と言う事はなかった。

その代わり犯人はその場にパタリ、と言う様な小さな音を立て倒れた。

第一章終了回

「はあ、はあはあ、終わった……………」

息を荒らげながら問いかける。それに前原も戸惑いながらも応じる。

「と、取り敢えず犯人は戦闘不能って所だな。だが、いつ意識を取り戻すかも分からん。手錠でもかけておいたらどうだ？」

前原の言つとおり手錠をかける榊原。すると前原の方から話しかけて来た。

「おい、右京」

「ん、何だ」

「ええっと、そのー、何だったのだ、さっきのアレは」

前原が聞いているのは炎の中からどうやって生還したか、の事だろう。だが今の榊原はその質問に答える事はできない。理由は簡単、榊原自身にも分からないからである。だから榊原は変に誤魔化す事なくその通り伝えた。

「そうか、本人にも良くわかっていなかったのか……………」

突然黙り出す前原。

「ん、どうした？」

こう言う空気は苦手なので取り敢えず話しかける。

「ありがと、な。右京が助けてくれなかったら、どうなっていたか分からなかった」

普通に感謝された。こう言う事を前原に言われたのは初めてかもしれない（言われた記憶は無いしやっぱり初めてかなあ）。と言うか、面と向かって言われるとかなり恥ずかしい。

「あぁっえ〜っと。あの時は突然の事だから、反射みたいな感じのもんだよ、気にするなって。第一今無事でココにいるんだから、なんも問題無し！」

「ふふつ。右京、国語のテストだったら0点になるレベルで言葉がぐちゃぐちゃだぞ」

前原の顔を見るとニコニコと笑っていた。こうやって見ると結構可愛いんだけどなあ。どうも性格が曲がってるから困る。（まあ悪いヤツでは無いのは今回の事でよく分かったけど）

と、突然明るい雰囲気になりかけた所に叫び声とも咆哮ともつかぬ声が割り込んだ。

「おおああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

気付かれぬよう熱で手錠を焼き切ったらしい犯人が力を再び振るう。

「何ッ！」

「！」

驚きながらも身構える二人。しかしその必要は無かった。犯人が放った炎は2人を襲わずに犯人自らに燃え移ったからだ。

！！

「ああああああああああひああああああああああ」

と言う叫び声も3秒と続かなかった。そう、本当にあっけなく終わった。

後に残ったのは黒い炭の様な塊だけ。そう、被害者とまったく同じ。しかしその塊もいまだに勢いを殺す事なく燃え続けている。

呆然と見つめる事しかできない2人。

「何が、起こったのだ……………」

「分からない……………これだけじゃ無い。さっき起こった事も全部。何もかも一切分からない。分かるはずが無い」

ファンファン、とパトカーのサイレンが聞こえる。おそらく近隣住民の通報を受けたのだろう。しかし自分たちは何をどう説明すれば良いのか、それすらも分からない今の状況では、出来るだけ到着が遅れて欲しいと思うばかりだ。

第一章終了回（後書き）

ここまで読んでいただいた方、本当にありがとうございました。
できれば次の章も見に行ってください（＾・＾・）
で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171x/>

解決不可能事件～超能力～

2011年11月27日16時56分発行